

〔論文〕

口頭発表クラスにおけるマイルーブリックの活用

内 山 喜代成

名古屋学院大学留学生別科

要 旨

本稿は中級日本語学習者を対象とした口頭発表クラスにおける実践報告である。中級の口頭発表クラスでは、学習者によって育成したい能力の観点（口頭発表の際に使用する文法や口頭発表の態度など）に差があり、教師としてどこに焦点を合わせるのかということが課題であった。そこで、学習者個人が育成したいと考える能力の観点を組み合わせ、個人の評価指標である「マイルーブリック」を作成し、それをを用いて評価活動を行うこととした。結果、マイルーブリックを用いることで、学習者は自身の能力に即した個人の目標設定ができ、また、能力の観点の組み合わせは、学習者個人の課題を段階的に改善していくプロセスを理解することにも有用であることが示唆された。

キーワード：ルーブリック、口頭発表、中級学習者、多様な学習者、能力育成

Use of “my rubrics” in oral presentation classes

Kiyonori UCHIYAMA

Institute for Japanese Studies
Nagoya Gakuin University

発行日 2018年10月31日

1. はじめに

名古屋学院大学留学生別科では、学習者の能力に応じて日本語Ⅰ～Ⅴのクラスが設けられている。また、日本語Ⅲ（中級）以上のクラスでは「書く」、「読む」、「聞く」、「話す」の4技能に分けられたクラスが開講されている。さらに「話す」は「話すa(1人が他者に向けて話す発表形式)」と「話すb(他者とのやりとり)」に分けられている。

筆者は2017年度秋学期に日本語Ⅲ「話すa」クラスを担当した。中級以上のクラスは例年、台湾・韓国・中国からの交換留学生が中心であり、母国の大学でも日本語を専攻或いは副専攻している学習者が多い。そのため、日本語での口頭発表の経験がある学習者も少なくない。しかし、ここで問題となるのが学習者によって口頭発表のパフォーマンスに関して得意・不得意とする能力が異なるということである。ある学習者は口頭発表の際に緊張して必要以上に話すスピードが速くなってしまったり、別の学習者は口頭発表には適切と言えない表現を使用して発表してしまったりするなど、学習者によって課題や育成したい能力の観点¹⁾が異なる。特に中級以上の学習者にこの傾向が顕著に表れる。そのため教師として、育成したい能力が異なる学習者にどのように対応すればよいのかということが課題であった。

本稿では、この課題の解消、緩和を目的として筆者が行った「マイルーブリック」を用いた日本語の口頭発表能力育成の試みについて報告する。

2. 先行研究と研究課題

ルーブリックとは、「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式（西岡 2004：293）」である。沖（2014）はルーブリック評価導入の際の留意点として、①到達目標ごとの成績評価（総括的評価）がどのように行われるかが学生に見えること、②成績評価（形成的評価や個々の学習活動の採点）が公平で客観的かつ厳格に行われること、③学習成果のフィードバックが行われることの3点を挙げている。ルーブリックを評価ツールとして用いる際には、評価観点とその尺度、つまり学習者が自身のパフォーマンスがどの程度のものであるのか判断でき、なおかつそのパフォーマンスに対して適切な評価やフィードバックを行う必要がある。寺嶋・林（2006）はルーブリックを用いることの効果として、学習者自身の課題の把握、ルーブリックを用いるという学習方法としての重要性の認識、学習目標の意識化を挙げ、課題としてはルーブリックという評価方法への不慣れを指摘している。ルーブリックを使用することで、学習者が課題達成に向けて自身がどの段階で何をやっているのかということが明確になり、さらには意識化されるが、

-
- 1) 本研究における「能力の観点」とは口頭発表のパフォーマンスに関する能力の観点である。具体的には「内容」・「面白さ」・「表情」・「声の大きさ」・「態度」・「文法」・「ことば」・「スピード」・「アイコンタクト」・「発音」の10項目であり、これらはルーブリック作成の過程で学習者によって挙げられたものである。その過程については本文にて詳述する。

一方で学習者がルーブリックに慣れていないことで戸惑いを感じる可能性があると考えられる。学習の意識化については、遠海ほか（2012）は学習者自身がルーブリックを作成するという実践を報告している。この実践は、大学の初年度教育において行われ、その結果、「ルーブリックを自分達で作成することにより、多くの学生が目標と省察を意識しながら学習活動を行った」と述べている。日本語教育においては、梶原・内山(2018)の口頭発表クラスにおける実践報告がある。中級の口頭発表クラスにおいて、学習者が口頭発表の評価観点を挙げ、その評価観点をもとにルーブリックを作成し、自己評価・相互評価活動を行うというものである。実践の結果として、「学習者自身がルーブリックを作成することは、目標達成に向けての準備活動を具体化、精緻化させ、作成したルーブリックを用いての評価は、自身のパフォーマンスに責任を生み、モチベーションを向上させる」と述べ、ルーブリックを学習者自身が作成することの利点を示している。一方で、課題としては、学習者が評価基準を作成することで、教師がどのような発表をさせたいのかわからないなど、学習者が評価基準を作成することへの疑問も挙がったという。

以上の先行研究から、ルーブリック活用が学習者の学習の準備活動や目標を明確化させ、さらに学習者自身が作成したルーブリックを用いることで、自身のパフォーマンスに対する評価が可視化され、さらには責任を持つようになるということがわかる。しかしながら、一つの教室において各学習者の育成したい能力が異なる場合、上記のようなルーブリックの利点を活かしつつ、多様な学習者個人に焦点を当てて対応するというような議論はこれまであまりされていない。

そこで、筆者は梶原・内山（2018）の実践をもとに、さらに学習者個人の能力育成に焦点化させるためにマイルーブリックを用いることを考えた。本研究におけるマイルーブリックとは、学習者個人が育成・評価したいと考える能力の観点を組み合わせた学習者個人の評価指標である。本稿では、マイルーブリック作成の過程とそれを用いた実践から、マイルーブリックの有効性と課題について明らかにすることを研究課題として設定する。

3. 実践概要と分析資料

本実践は2017年度秋学期日本語Ⅲ「話すa」（全12週）において行ったものである。学習目標は「自分の口頭発表における課題や目標を明確にした上で、自分の考えを根拠や背景を示しながら、他者が理解できるように伝える」と設定した。この目標設定は先述したように教室では学習者によって課題や育成したい能力が異なるからである。また、学習者個人の考えを伝えることを目標としたことから、発表のトピックとして、答えを一つに決めることができない思考実験を扱うこととした²⁾。具体的に扱ったトピックについては授業スケジュールの説明に沿って述べる。授業スケジュールは以下の表1の通りである。

学習者は台湾人3名、韓国人2名、中国人1名の計6名である。いずれの学習者もこれまでルー

2) 本実践では、北村良子（2017）『論理的な思考を鍛える33の思考実験』彩図社の中から3つのトピックを選定した。

表1 授業スケジュール

週	授 業 内 容	週	授 業 内 容
1	オリエンテーション 発表①	7	スピーチ大会準備
2	発表①自己評価・相互評価	8	スピーチ大会準備
	発表の観点について話し合い	9	スピーチ大会ふりかえり
3	発表観点からループブリック作成	10	マイルループブリック作成 発表③準備
4	ループブリックを用いて発表①の自己評価・相互評価	11	発表③ 自己評価・相互評価
5	発表② 準備	12	コース全体のふりかえり
6	発表② ループブリックを用いて自己評価・相互評価		

ブリックを用いた評価の経験はないとのことだった。

第1週はまずコースについての説明を行った。次に学習者が現段階の口頭発表の能力を確認するために、「いい発表をするように」という指示だけ出し、「トロッコ問題³⁾」をトピックとして発表①を行い、録画した。第2週は発表①の映像を見ながら、「いい発表とは何か」、「聞き手はどのような能力の観点で評価するのか」ということをグループで話し合い、能力の観点をグループで挙げてもらった。第3週は、挙げられた能力の観点ごとにブレインストーミングを行い、各観点のいい発表の基準となる要素をクラスで共有した。その後、4段階のパフォーマンスの特徴を表す記述語を考え、ループブリックを作成した。また、ループブリックの作成に当たっては、いくつかの例を提示した。第4週は作成したループブリックを用いて、発表①について、再度、自己評価・相互評価活動を行い、学習者が能力の観点ごとに自分が何を得意・不得意としているのかを明確化させた。第5週は発表①の改善点などを考えた上で、発表②に向けた準備を行った。発表②のトピックは「村のおたずね者⁴⁾」とした。第6週は発表②を行い、作成したループブリックを用いて自己評価・相互評価を行った。

第7、8週は大学の国際センターの企画としてスピーチ大会があったため、その練習を行った。第9週は作成したループブリックを用いてスピーチ大会の発表の映像についてふりかえりを行い、発表①②から自身の発表がどのように変化したのか確認をした。第10週は作成したループブリックから各学習者が必要だと考える能力の観点を組み合わせたマイルループブリックの作成と発表③の準備を行った。マイルループブリックは、これまでの発表の自己評価・相互評価をもとに各学習者が育成したい能力の観点を選定し、その観点の評価の比重も決めるという順で作成した。その際にマイルループブリックの能力の観点ごとに小目標と改善方法を評価シートに記入することとした。その後、発表③の準備に移った。発表③のトピックは「テセウスの船⁵⁾」とした。第11週は発表③

3) 暴走するトロッコの先にいる5人を助けるか、1人を助けるかという思考実験。

4) 暴徒化した村人5人と濡れ衣を着せられたよそ者1人のどちらを救うのかという思考実験。

5) 船が修理され続け、部品が交換され続けた場合に、それが本物と呼べるかという思考実験。

とその自己評価・相互評価活動を行った。また、自己評価については、学習者が自身の発表の映像を見ながらマイルーブリックの能力の観点ごとにどの程度達成されたのかシートに記入することで行った。第12週はコース全体のふりかえりとした。成績におけるルーブリックを用いた口頭発表の自己評価・相互評価の割合は40%とし、相互評価における教師評価の割合は他の学習者と同じ割合とした。

本研究では分析資料として、クラスで作成したルーブリック、各学習者のマイルーブリック、自己評価・相互評価の際に記入した評価シート、また、教師の授業記録を用いて、研究課題の検証を行う。

4. 結果

実践の結果として、まず、クラス全体で行ったルーブリック作成について述べ、6名の学習者がどのようなマイルーブリックを作成したのかを示す。次に事例として2名の学習者（台湾人：リン、韓国人：ソヨン）に焦点を当て、マイルーブリックの作成とそれを用いた学習がどのように行われたのか述べる。この2名を対象とするのは、学期中欠席がなく、評価シートなどの資料がすべて揃っていることによる。

4.1 学習者によるルーブリックの作成とマイルーブリック

第1, 2週は、「いい発表をする」という指示のもとで発表①が行われ、学習者は発表①の自身の映像を見ながら、能力の観点を挙げていった。挙げられた口頭発表における能力の観点は、「内容」・「面白さ」・「表情」・「声の大きさ」・「態度」・「文法」・「ことば」・「スピード」・「アイコンタクト」・「発音」の10項目であった。この10項目をもと第3週でルーブリックの作成を行った。梶原・内山（2018）において、教師が評価基準を決めないことへの疑問が挙がったとの課題が示されていることから、本実践では教師が評価したい観点として「内容」を提示した。そこで、「内容」の部分のルーブリックの記述語については、教師が先に作成し、その上で学習者の意見を加えて修正することとした。「内容」以外の項目については、クラスを2つのグループに分けて作成し、最後にクラス全体でまとめた。学習者が作成したルーブリックは以下の表2の通りである。

作成に当たっては、筆者が以前に作成したルーブリックや前学期に口頭発表クラスで学習者が作成したルーブリックを例示した。しかし、学習者達はこれらをあまり参考にすることなく、自分達の記述語を作っていた。これは、発表①の映像を見ながら、能力の観点を挙げていったことにより、学習者の中でのある程度基準が整っていたからだと考えられる。また、特に自分のパフォーマンスが納得できなかった能力の観点については、積極的に意見が出されていた。4段階の基準は、「S」は合格点以上、「A」は合格点、「B」は合格点に届かない、「C」は不合格として作成を行った。比重については「S」の合計が100点になるように各学習者で設定した。パフォーマンスごとの記述語の作成が学習者にとって困難ではないかと懸念していたが、予想に反して問題なく表2のルーブリックが作成された。記述語については、筆者が誤字などの修正は行なったが、

表2 学習者が作成したループリック

評価項目	S	A	B	C
内容	自身の考えを根拠や理由を示した上でわかりやすく、関連性を示しながら詳しく説明することができる。	自分の考えを根拠や理由を示して説明できる。それらの関連性もわかる。	自分の考えは話せているが、根拠や理由が乏しい。また、その関連性もわかりにくい。	自分の考えが話せていない。また、根拠や理由の関連性もわからない。
面白さ	発表が面白くてみんな興味があって、集中して聞いている。相手に自分の発表を聞きたいという気持ちを持たせる。	内容が面白くて、みんなが聞いている。表現とか内容とか普通。	つまらなくて、みんなだいたい聞いている。聞いている人にも眠くなる。とてもつまらない。	内容は全然面白くない。聞いている人も眠くなる。とてもつまらない。
表情	内容によって適当な表情を使う。強調する部分はちゃんと伝えて表情で示す。	表情があるけど、ちょっと不自然。明るい表情で発表できる。	表情が少なくて不自然だ。たまに笑うが、ちょっと緊張が見られる。	無表情。全然笑わない。
声の大きさ	みんなが聞こえる大ききさで、後ろに座っている人まで聞くことができる。聞いている人は良く聞こえる。ちょうどいい。	ちょうどいい大ききさ。少し聞こえないけど、文章は理解しにくいことはない。	聞こえるが、もっと大きい方がいい。文章に理解しにくい。部分の文章だけわかる。	全然聞こえない。うるさいとか小さすぎて、聞こえない。
態度	緊張しないで自然に発表する。最初、最後に挨拶して、ちゃんと立って発表する。緊張するかどうか見て分からない。	緊張しないで、ちゃんと立って発表する。あいさつがあって、少し緊張しているけど、最後まで発表できる。	緊張して、聞いている人も不安になる。あいさつがない。緊張して動作が不自然。	挨拶だけする。緊張していることが分かる。緊張して発表できない。
文法	文法が正しくて自分の考えはちゃんと相手に伝えられる。すべて正しい文法で、全然問題がない。	正しい文法を使って、わかりやすい。少し間違える文法を使うけど、理解することには問題ない。	文法はちょっと間違えて、内容は理解できる。少し間違える文法を使って、理解することにはちょっと問題がある。	間違える文法を使う。多く正しくない文法を使って、理解しにくい。
ことば	話し方が正しくて、わかりやすい単語を使ってみんながわかりやすい。理解しやすい単語を使って、ことばの使用も正しくて、文章構成はスムーズだ。	理解しやすいが、少し間違えることもある。少し単語の使用は正しくないけど、理解することには問題ない。	正しい単語を使うが、多く間違える言葉がある。単語の使用は正しくないけど、内容は大体わかる。	難しい単語を使ってわかりにくい。かたい単語を使って理解しにくい。

口頭発表クラスにおけるマイルーブリックの活用

スピード	適当なスピードで強調するところをゆっくり話すことができる。ちゃんと聞こえて、発表の内容が理解できて、強調するところもゆっくり発表する。	みんなが聞こえやすいスピード。大体内容とスピードが大丈夫だけど、強調が少しできない。	ちょっと速すぎて聞こえにくい。ずっと同じスピードだけ。強調するところはない。	スピードが速すぎて、時々遅すぎる。速すぎるとか、遅すぎて、聞こえないか、聞いて変な感じがする。
アイコンタクト	聞いている人たちを見ながら、自然にアイコンタクトをすることができる。自分の紙だけ見ないで、みんなにアイコンタクトする。	みんなの目を見て原稿を見ないで発表する。一方だけ見ないで、全部の方向を見ながら、発表する。	時々アイコンタクトをする。一方だけ見て、自分の紙をよく見ることもある。	アイコンタクトをしないで、ずっと原稿を見ている。自分の紙ばかり見ている。
発音	聞いている人は理解できて、正確な発音。日本人のように正確に伝える。	ちょうどいい発音で発表する。だいぶ正確だけど、外国人のような発音を感じる。	ちょっと間違えがあるが理解できる。少し、理解しにくくて、ちょっと正しくない。	不正確な発音で意味が全然分からない。理解しにくくて発音が変わる。

表現については基本的には学習者が作成したままである。

表3は6名の学習者が作成したマイルーブリックの構成と比重である。比重については「S」評価の点数のみ記す。

マイルーブリック作成に当たり、教師が評価したい観点として「内容」だけは必ず組み込むように指示をした。表3のマイルーブリックの構成からは、学習者によって育成したい能力の観点が異なり、同じ能力の観点であっても、比重の違いから重視する程度が異なることがわかる。また、表3の能力の観点は学習者が選定をした順に左から記している。表2をもとに作成されたものであるが、必ずしも表2の上からの順になっていないことから、各学習者の中での優先順位があったことがわかる。加えて、6名の学習者が作成したマイルーブリックにおいて、10の能力の

表3 6名の学習者のマイルーブリックの構成（いずれも仮名）

名前	能力の観点と比重				
リン	内容 (30)	表情 (15)	声の大きさ (15)	態度 (20)	アイコンタクト (20)
ソヨン	内容 (30)	表情 (25)	スピード (20)	文法 (15)	発音 (10)
チン	内容 (25)	態度 (25)	文法 (10)	ことば (15)	アイコンタクト (25)
コウ	内容 (30)	表情 (15)	ことば (20)	発音 (20)	アイコンタクト (15)
ギ	内容 (30)	面白さ (10)	発音 (25)	文法 (15)	ことば (20)
ソニイ	内容 (30)	表情 (20)	声の大きさ (20)	発音 (10)	アイコンタクト (20)

観点の中で使用されないものはなかったことから学習者の育成したい能力が多様であることがわかる。また、マイルーブリックに組み込む能力の観点の数は制限しなかったが、全員5つとなった。比重に関する指示も行わなかったが、「内容」については教師が評価したい観点としたためか学習者全員が比重を大きくしている。以下、リンとソヨン为例に学習者がどのようにマイルーブリックを作成し、学習を行っていったのか述べる。

4.2 リンのマイルーブリックによる学習と評価

リンは台湾の大学で日本語を専攻している。そのため、日本語で口頭発表する機会もこれまでに何度もあったというが、緊張しやすい性格が発表の際の課題であると自身でも感じていた。リンは発表②の自己評価を表4のように行い、表5のようにマイルーブリックをつくり、発表全体の目標と能力の観点ごと小目標・改善方法を記述している⁶⁾。

リンは発表②の自己評価において、「B」をつけた能力の観点4つのうち、3つをマイルーブリックに組み込んだ。また、この観点は発表③の目標である「緊張しないで発表する」という自身の大目標に関連していることがわかる。特に「声の大きさ」と「アイコンタクト」については発表②の自己評価でも改善点として挙げており、緊張しやすいリンにとっては重要なものであったと考えられる。それぞれの改善方法についても、緊張してしまうことがパフォーマンスの低下につながることを理解しており、緊張しないために原稿を覚えるという方法が示されている。ただ改善方法には「できれば」という記述があった。この記述について筆者が授業内にリンに確認したところ、「完全に覚えることを目標とすると少しでも忘れてしまったら、もっと緊張してしまう」とのことだった。リンは「緊張しない」ことを重要視していたため、改善方法の「できれば」という記述は残すこととした。

上記のマイルーブリックをもとに発表③の準備を行い、発表③に臨んだ。以下の表6は発表③の自己評価である。まず、マイルーブリック自体にチェックを入れた上で、表中の「達成度」の

表4 リンの発表②の自己評価

内容	面白さ	表情	声の大きさ	態度
A	A	B	A	B
文法	ことば	スピード	アイコンタクト	発音
B	A	A	B	A
良かった所・改善点など 文法がほとんど間違えなかったが、声をもっと大きいほうがいい。 アイコンタクトはあまりしかなかった、次にもっとするほうがいい。				

6) 以下、表4～9は学習者の自己評価シートの記述通りに筆者が表として作成したものである。基本的に表は評価シートの体裁と同じであり、表記は原文のママである。

口頭発表クラスにおけるマイルーブリックの活用

表5 リンのマイルーブリックの構成と目標・改善方法

発表の目標	緊張しないで発表できる。	
能力の観点(比重)	目 標	改善方法
内容 (30)	もっと詳しくて自分の理由を説明する。	原稿を書くとき、ちゃんと自分の理由を考えたら、書き始める。
表情 (15)	ほほえみだけでもしてください。	発表する前に、できれば原稿の内容を覚えて、リラックスして、そんなに緊張しないかもしれない。
声の大きさ (15)	声がもっと大きくて。	最初ちょっと緊張したから、声がちょっと小さくなったから、緊張しないとき、発表を始める。
態度 (20)	緊張しないで。	発表する前にリラックスする。
アイコンタクト (20)	できれば、原稿をあまり見ないで。	発表を準備するとき、発表の内容をできれば覚えて、発表のとき、原稿を見ないところができる。

表6 リンのマイルーブリックを使用した自己評価

能力の観点	達成度	小目標がどれくらい達成できたか(コメント記入)
内容	S	自分の理由をちゃんと説明した。
表情	B	緊張が見られる。
声の大きさ	S	今回の大きさちょうどいい。
態度	A	ちょっと緊張していたが、最後まで発表できた。
アイコンタクト	A	原稿を全然見ないで発表するのはやはり難しい。
<p>クラスメートの評価を聞いて、自身のスピーチについてできた所・改善などを書きましょう</p> <p>今回の声の大きさがちゃんとできたのはよかったと思う。しかし、原稿をちゃんと覚えなかったから、時々原稿を見てアイコンタクトをして、やはり緊張を見られた。表情はまた頑張らなければならいと思う。内容はちょっと長いけど、自分の考えを説明したのがよかった！</p>		

部分に改めて評価を記入し、観点ごとに小目標の達成度の記述を行った。

「表情」についての評価は発表②と同じ「B」であるが、それ以外は発表②より一段階高い評価がつけられている。「表情」の評価コメント欄には「緊張が見られる」と記入されており、頑張らなければならいと述べられている。しかし、クラスメートから「緊張するかどうか見るだけでわからなくて、よかったですね！」という相互評価のコメントもあり、リン自身が感じるよりも他者にとっては気にならなくなっていた。「内容」についてはリン自身も納得できたようで「内容はちょっと長いけど、自分の考えを説明したのがよかった！」と記入している。また、同様に「声の大きさ」についてもクラスメート全員が「S」の評価をつけており、リンが改善を意識して発表に臨んだことがわかる。緊張しないように発表することが完全にできたわけではないが、意識

した能力の観点について、段階的ではあるが改善ができています。

以上のようにリンは自身の緊張しやすい性格から、能力の観点ごとに具体的に改善方法を考え、口頭発表に臨んだ。結果として「表情」については納得できない部分があり、今後も課題としていく必要性を感じながらも、それ以外の能力の観点では改善が見られ、納得できていることがわかる。

4.3 ソヨンのマイルーブリックによる学習と評価

ソヨンも韓国の大学では日本語を専攻している。しかし、日本語で口頭発表の機会はこれまでにはさほどなかったという。ソヨンは自身の課題を人前に立つと話すスピードが速くなってしまうことだと捉えていた。ソヨンの発表②の自己評価を表7として示す。この自己評価をもとに、表8のようにマイルーブリックをつくり、発表全体の目標と能力の観点ごと小目標・改善方法を記述している。

ソヨンは発表②の自己評価において6つの「B」をつけている。特に「スピード」と「発音」については、「スピードが速すぎて発音が不正確として内容が理解できなかった」と自己評価シートに記入していることから、自身の課題として捉えていることがわかる。発表②のパフォーマンスにおいて、「スピード」と「発音」に納得できず、育成したいと考えたことから、ソヨンはこれらの能力の観点を組み込んだマイルーブリックを作成した。「表情」と「文法」についても発表②の自己評価で「B」としたものである。また、発表②の相互評価において、クラスメートより「内容」について、「もう少し詳しく意見を聞きたかった」、「ちょっとみじかいと思う」とのコメントがあったことから、「内容」の目標に「もっと詳細に示しながら、またわかりやすく説明することが必要だ」と記入が行われた。また、「表情」については、筆者が「あまり表情の変化がなかったように感じます」とコメントしたことにより、組み込まれたものであると考えられる。このマイルーブリックをもとに発表③の準備を行い、発表③を行った。次の表9は発表③の自己評価である。

発表②では「A」、「B」のみであったが、発表③では「S」、「A」が自己評価の中心になっている。「スピード」に関しては「てきとうなスピードで発表した」とある。ソヨン自身も納得できたよ

表7 ソヨンの発表②の自己評価

内容	面白さ	表情	声の大きさ	態度
A	B	B	A	A
文法	ことば	スピード	アイコンタクト	発音
B	A	B	B	B
良かった所・改善点など スピードが早すぎて発音が不正確として内容を理解できなかった。 しかし、次の発表はもう少し詳しく私の考えを発表できることが必要。				

表8 ソヨンのマイルーブリックの構成と目標・改善方法

発表の目標	自分の考えをゆっくり強調して発表する	
能力の観点(比重)	目 標	改善方法
内容 (30)	次の発表では私の考えをもっと詳細に示しながら、またわかりやすく説明することが必要だ。	問題についてより深く考えて内容を記す。
表情 (25)	明るい表情で発表する。	もつと笑いながら発表する。
スピード (20)	強調するところをもっとちゅういする。	適当なスピードで強調するところはゆっくり話す。
文法 (15)	正しい文法を使ってみんながわかりやすいように発表する。	発表する前何度も文法が正しいかどうかチェックする。
発音 (10)	もっと自然に発表することが必要だ。	原稿を読みながら練習する。

表9 ソヨンのマイルーブリックを使用した自己評価

能力の観点	達成度	小目標がどれくらい達成できたか（コメント記入）
内容	S	しょうさいにわかりやすく説明した。
表情	S	もっと明るい表情で発表した。
スピード	S	てきとうなスピードで発表した。
文法	A	正しい文法を使ってわかりやすかった。
発音	A	だいたい問題なかった。
<p>クラスメートの評価を聞いて、自身のスピーチについてできた所・改善点などを書きましょう</p> <p>前の発表より表情はもっと明るい表情で発表してスピードもみんなが聞こえやすいスピードで強調もちょっとできた。でも発音はもっとれんしゅうするひつようがある。またつぎの発表は私がきめたもくひょうをだいたいできるように発表しなければならない。</p>		

うで、クラスメートからも「スピードもちょうどいいね～」などの肯定的なコメントが多く、相互評価でも1人を除いて「S」をつけていた。また、「内容」・「表情」についてもクラスメートから「自分の考えと理由を示して説明できて、声もちょうどいいと思う」、「例があって説得力があった」、「明るい表情で発表して、よかったと思います。よく上達しました」、「表情も自然だと思う～」とのコメントがあった。ソヨンのコメントに「明るい表情で発表してスピードもみんなが聞こえやすいスピードで強調もちょっとできた」とあることから、他者からの評価とソヨン自身の評価が同様のものであったと推測でき、さらにソヨンの目標はおおむね達成されたことがわかる。一方で「発音」についてはルーブリックの「S」の基準が「日本人のような正確な発音」となっているため、「A」と自己評価している。「発音」についてはクラスメートも全員「A」の評価をしているが、ソヨン自身は納得できない部分があったようで、「もっとれんしゅうするひつようがある」と記入している。このことから、ソヨン自身が「発音」に強いこだわりを持っていること

がわかる。

このようにソヨンは、発表②の自己評価で評価が低く、相互評価でもクラスメートや教師から指摘を受けた観点を中心にマイルーブリックを作成した。発表③ではマイルーブリックをもとに発表の準備を行い、特に焦点化した「スピード」、「発音」については改善することができたが、「発音」についてはさらなる向上を目指し、今後の課題としている。

5. 考察

ここまで2名の学習者がマイルーブリックを用いて、どのように学習を行ってきたのか見てきた。遠海ほか（2012）、梶原・内山（2018）で示されている通り、本実践においてもコース最後のふりかえりで学習者から「クラスに作った標準によって、自分がどこを頑張るかわかります（原文ママ）」とのコメントがあり、ルーブリックを学習者自身が作成することにより、目標に向けて省察を繰り返しながら、口頭発表の準備が行われ、その準備活動も具体化、精緻化されたことが確認された。その上で、マイルーブリックを用いることの有効性について考えてみたい。

マイルーブリックの作成には、学習者がどのような能力の観点を重視するのか自身で認識する必要がある。本実践では、初めに「いい口頭発表」という枠組みで能力の観点をクラス全体で共有し、自己評価を行うことで、学習者個人の課題を明確化させた。これには学習者によって課題が異なるという前提があった。実際に学習者が作成したマイルーブリックの能力の観点の構成や比重に差があったことでこの前提は証明されたと考える。そして、学習者は明確化した自身の課題に対してマイルーブリックを用いることで、具体的な改善方法を考え、準備活動を行うことができた。

また、リンの「文法」やソヨンの「アイコンタクト」などは発表②の自己評価において低く評価しているが、マイルーブリックには組み込んでいない。マイルーブリックに組み込む能力の観点の数は制限していないことから、学習者は自身の課題とする能力の観点を一度にすべて改善しようとするのではなく、発表全体の目標に合わせて能力の観点を取捨選択していることがわかる。2名はコース全体を次のようにふりかえている（いずれも原文ママ）。

リン：（コース前）声が小さくて緊張しすぎて、アイコンタクトもできなかった。原稿をちゃんと覚えなかった。

（コース後）声が大きく発表できるが、まだ緊張している。声の大きさは改善し、後で座っている人でも聞かれる。表情はもっと自然がほしい。原稿をあまり見ないでアイコンタクトをできるようになった。今度は正しい文法や言葉で相手に自分が言いたいことをちゃんと伝える。

ソヨン：（コース前）スピーチする時、原稿を見ないでしなければならないが、ずっと見て声も表情も明るくしなければならなかったが、緊張をしすぎた。

（コース後）原稿を見ないでするのは今も難しいけど、声は少し大きくなって表情も

一段と明るくなった。初めて発表した時より声も高まって友達の前で発表することが適応になったのか、最後にはわらいな（わらいながら）がスピーチできてよかった。

2名の学習者はコースを通して、すべての課題を改善できたわけではないが、自分が育成を目指した能力の観点については改善できたことを実感している。一方で2名とも自身の課題についても記述していることから、コースを通してできるようになったことと、これから取り組むべき課題の認識ができていられると考えられる。加えて、リンは今後の目標として、「文法」と「ことば」を挙げている。「文法」は発表②で「B」と評価しており、リンにとっては課題として残り、育成したい能力の観点でもあった。発表③のマイルーブリックには組み込まなかったが、今後の目標を示している。このことから、マイルーブリックの能力の観点を組み合わせは、学習者個人の課題を段階的に改善していくプロセスを理解するのにも有用であると考えられる。また、表3で示した通り、学習者個人の育成したい能力に即して構成を行えることから、マイルーブリックは多様な学習ニーズにも対応でき、かつ学習者に学習の選択肢を広げるのにも有効であると考えられる。

加えて、マイルーブリックの活用の波及効果として、相互評価におけるクラスメートのコメントの具体化が確認できた。マイルーブリックを使用することにより、発表を聞く側のクラスメートも発表者がどのような能力の育成を目指しているのかが具体化し、発表の際に注目する点が明確になることで、発表前のアドバイスや発表後のコメントを行いやすくなることが明らかになった。いい発表を一般化するのではなく、各学習者の特性を活かした、いい発表を行うためのフィードバックが行われていた。

一方で相互評価活動の課題として「文法」の評価が学習者から挙がった。ルーブリックの作成段階で筆者が学習者に正しさの判断をどのようにするのか質問した際には、学習者は問題ないと思うと答えていた。発表③ではソヨンとギが「文法」を組み込んだマイルーブリックを作成した。しかし、ギはクラスの中で最も文法ができる学習者であったため発表③の評価活動において、他のクラスメートが「文法」の評価に戸惑う場面があり、教師がどのように判断するのか気にしながら相互評価を行うという場面も見られた。学習者はレベルごとにクラス分けされているため、能力の観点によっては学習者間で相互評価を行うことが難しい場合もある。このような能力の観点については、教師のみが評価するのが適しているのか、或いは学習者間で相互評価する場合にどのように評価を行うのか、今後の実践で検討していく必要がある。

6. おわりに

ここまで、マイルーブリックの有効性と課題について述べた。最後にマイルーブリックの可能性について述べる。本実践においては、学習者がクラス全体で共有できるルーブリックを作成した後にマイルーブリックを作成した。そのため、マイルーブリックを使用した発表は1回のみしか行うことができなかった。学習者がルーブリックの使用や評価が初めてだったことから、段階

的に慣れるためにはこのような手順が必要であったと考えている。本実践の発展としては、能力の変化に応じてリンが今後の課題として示したように能力の観点の入れ替えや追加、或いは発表のテーマによってマイルーブリックを再編成していくことも可能であろう。これらは今後、実践・検証し、稿を改めて報告したい。

参考文献

- 遠海友紀・岸磨貴子・久保田賢一（2012）「初年次教育における自律的な学習を促すルーブリックの活用」『日本教育工学会論文誌』 Vol. 36, pp. 209-212.
- 沖裕貴（2014）「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」『立命館高等教育研究』第14号, pp. 71-90.
- 梶原彩子・内山喜代成（2018）「自ら作成した評価基準を用いて、学習者は自分たちをいかに評価したか—口頭発表クラスにおけるルーブリック作成の試み—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol. 24, No. 2, pp. 128-129.
- 寺嶋浩介・林朋美（2006）「ルーブリック構築により自己評価を促す問題解決学習の開発」『京都大学高等教育研究』 Vol. 12, pp. 63-71.
- 西岡加名恵（2004）「評価指標（ルーブリック）」日本教育方法学会（編）『現代教育方法事典』, 図書文化社, p. 293.